

研究評価に関する国際シンポジウム

—研究評価改革に関する国際動向—

2023年（令和5年）11月8日（水）に、「研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）」及び「Coalition for Advancing Research Assessment（CoARA）」の関係者を交えて、研究評価に関する国際シンポジウムを開催しました。その結果概要を報告します。

1. 開催趣旨

研究評価は、大学等への資金配分や、研究者の業績評価等、さまざまな場面で行われていますが、一方、資金助成や雇用・昇進等のための評価の際に、ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）等雑誌ベースの数量的指標を一律に用いることは慎むべきとの提言はこれまでにしばしばなされてきました。雑誌ベースの指標は、個々の論文の質を直接反映していないこと、研究の多様な側面における質を示すことができないためであり、特に、個々の研究課題や個人の評価において、雑誌ベースの指標のみを用いることは、適切ではないとされています。

こうした背景の下、「研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA）」は、2012年12月の米国細胞生物学会（ASCB）の年次大会において、学術雑誌の編集者や研究者が議論した内容を元にまとめられました。また、「研究評価の改革に関する合意」は、2022年7月に、欧州委員会（EC）、欧州大学協会（EUA）、Science Europeなどが主体となってまとめられ、2022年12月に、同合意を推進するための有志連合「Coalition for Advancing Research Assessment（CoARA）」が発足しました。

このような研究評価に関する国際的な動向を背景に、本シンポジウムでは、DORAやCoARAの関係者を交え、研究評価改革に関する国際的な動向を紹介するとともに、日本における研究開発評価に関する課題や改革の方向性に関して議論を行いました。

2. 日時 2023年（令和5年）11月8日（水）

3. 会場 日本科学未来館 7階 未来館ホール

4. 主催 文部科学省、国立研究開発法人科学技術振興機構、独立行政法人日本学術振興会

5. 開催プログラム

| | |
|-------------|---|
| 14:00-14:05 | 開会のご挨拶: 水本 哲弥 , 独立行政法人日本学術振興会 (JSPS) 理事 |
| 14:05-14:20 | 本シンポジウムの紹介: 林 隆之 , 政策研究大学院大学 教授 |
| 14:20-14:40 | 講演 1: 清浦 隆 , 文部科学省 大臣官房審議官 (科学技術・学術政策局担当) 講演題目「日本の科学技術政策及び研究評価について」 |
| 14:40-15:20 | 講演 2: ステファン・カリー (Stephen CURRY) , DORA 運営委員長 講演題目「研究評価に関するサンフランシスコ宣言 (DORA) -卓越性の測定方法について再考する-」 |
| 15:20-16:00 | 講演 3: リディア・ボレル-ダミアン (Lidia BORRELL-DAMIÁN) , サイエンス ヨーロッパ 事務総長 (CoARA 運営委員会メンバー) 講演題目「研究評価改革における国際動向」 |
| 16:00-16:20 | 休憩 |
| 16:20-17:55 | パネルディスカッション ファシリテータ: 林 隆之 , 政策研究大学院大学 教授 パネリスト: - ステファン・カリー (Stephen CURRY) , DORA 運営委員長 - リディア・ボレル-ダミアン (Lidia BORRELL-DAMIÁN) , サイエンス ヨーロッパ 事務総長 (CoARA 運営委員会メンバー) - スーザン・モリス (Susan MORRIS) , カナダ自然科学・工学会議 研究 評価ディレクター - 佐藤 邦明 , 東北大学副学長 - 金子 博之 , 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 理事 |
| 17:55-18:00 | 閉会のご挨拶: 金子 博之 , 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) 理事 |

司会 幸本和明, JST 戦略研究推進部 研究評価グループ 調査役

6. 結果概要

(1) 「開会挨拶」 独立行政法人日本学術振興会 水本理事

主催側を代表して挨拶申し上げます。講演者・パネリストの皆様、本シンポジウムの企画から本日の運営まで務めていただく林教授にお礼申し上げます。本シンポジウムでは、定量的な評価、例えば、ジャーナル・インパクト・ファクター等の雑誌ベースの数量的な評価ではなく、研究者や研究そのものの質で評価する定性的な評価に転換すべきということに焦点を当てる。日本学術振興会は、ファンディングエージェンシーとして、科研費といった競争的研究資金、特別研究員を代表する若手研究者の人材育成、WPIといった世界的な研究拠点の構築など様々な事業を実施している。本会の研究評価は、すべてピアレビューで実施しており、その分野の専門家である同僚の研究者（ピア）が対象の研究計画や成果等について、学術的重要性、研究方法の妥当性、研究遂能力や研究環境の適切性等の観点で評価を行い、研究の質を確認している。このことが人文社会科学から自然科学分野まで全分野を対象に、研究者の自由な発想に基づく研究を支援する、本会ならではの最大の特色であり強みであると考えている。2023年5月に仙台で開催されたG7科学技術大臣会合では、オープンサイエンス推進に向け、研究評価とインセンティブの付与等の支援を目指す共同声明で発表された。本日は、DORAやCoARAといった国際的な動きに加え、それらを踏まえた各国の施策などをご紹介いただけることは、きわめて時宜にかなったもの。幅広いステークホルダーとの間で、今後の日本における研究評価のあるべき姿について議論できることを、私自身も大変楽しみにしている。



開会挨拶をする JSPS 水本理事

(2) 「本シンポジウムの紹介」 政策研究大学院大学 林教授

最近、研究評価改革が国際的に展開されており、例えば DORA（研究評価に関するサンフランシスコ宣言）、Leiden Manifesto（ライデン声明）、The Metrics Tide などの提言があげられる。また、欧州では、現在の研究評価システムが JIF や引用数など偏った利用がなされ、研究の質、実績、インパクトの評価が不十分であることから、定量的指標でなく、ピアレビューなどで研究の本質的な価値を評価



本シンポジウムの紹介を行う
政策研究大学院大学 林教授

すべきといった考えから、研究評価システム改革の動きが加速している。

一方、日本では伝統的に日本はピアレビューをかなり重視してきたが、定性的な評価のあり方について、十分に議論をして実施しているわけではない。

このような背景のもと、今回のシンポジウムでは、DORA や CoARA の関係者を交え、研究評価改革に関する国際的な動向を紹介するとともに、日本における研究開発評価に関する課題や改革の方向性に関して議論を行いたい。

(3) 基調講演

① 「日本の科学技術政策及び研究評価について」 文部科学省 清浦大臣官房審議官

日本では、科学技術・イノベーション基本計画や統合イノベーション戦略 2023 等で国の研究評価を規定している。特に、2023 年 5 月の G7 仙台科学技術大臣会合で取りまとめられた大臣コミュニケを踏まえ、引き続き、科学技術によるグローバルな課題解決への貢献、特に、研究データインフラの相互運用性の向上、研究評価とインセンティブの付与、学術論文等に係るオープンサイエンスの取組、研究セキュリティ・インテグリティのベストプラクティス文書等の普及、G7 をはじめとするパートナーとの国際頭脳循環の推進等について、日本が積極的に貢献していく。

研究評価に関する今後の課題として以下の 4 点が挙げられる。①我が国では、研究者の研究業績評価については、これまで、インパクトファクターだけに頼らず、研究の“質”についても考慮しながら、評価してきた。②他方、昨今、大学等に対する研究費の戦略的な重点措置の文脈の中で、論文引用数を中心とした定量的な評価が重視される傾向が強くなってきていることも指摘されている。③G7 での議論も踏まえ、オープンサイエンス推進政策とも連携しながら、学術論文の定量的な評価のみによらない、新たな評価体制を確立していく必要である。④その際、如何に研究組織やファンディングエージェンシー等で具体的に実践していけるかが重要な課題であり、そのような観点からも、国際パートナー間で、教訓を共有していくことが重要である。



基調講演を行う文部科学省 清浦審議官

② 「研究評価に関するサンフランシスコ宣言（DORA） -卓越性の測定方法について再考する-」 DORA カリー運営委員長

「Excellence（卓越性）」については幅広く使用されているが、その概念についての定義は明確ではない。一般的には、トップジャーナルに論文を発表するか、多くの研究資金を獲得する場

合を意味するが、そもそも質の高い研究とは何かを定義しなければ過当競争の中で色々な問題が発生する。アカデミアにおいては、どのジャーナルに発表したかが非常に重要であることから、ジャーナル・インパクト・ファクター（JIF）に集中しすぎると論文発表が遅れるという問題が発生する。DORAは18の提言を行っており、うち17の提言は、助成機関、学術機関、出版社、数量的指標を提供する機関、研究者それぞれに対するものである。例えば、学術機関に対しては、次の2項目が挙げられる。



基調講演を行うDORA カリー運営委員長

- ・ 雇用、任期、昇進の決定する際に用いられる判断基準が明示的であること、特にキャリアの初期段階にある研究者に対して、出版物の数量的指標やその論文が発表された雑誌がどのようなものであるかということよりも、その論文の科学的内容の方がはるかに重要であることを、はっきりと強調すること。
- ・ 研究評価を行う上で、研究出版物に加えて研究の（データセットやソフトウェアを含む）すべての成果の価値とインパクトを検討すること。また、政策や実用化への影響といった研究インパクトの質的な指標を含む、幅広いインパクトの評価基準を考慮すること。

研究評価にあたっては、論文の出版だけでなく政策への影響やその実践といったインパクト等の質に関する指標を含めて、全ての研究成果の価値を考慮しなければならない。一般的なプロポーザルの審査を行うと、男性の研究者が採択される。性別、民族・人種の多様化が進まない。

変化のための一つのツールとして、世界的に多く採用されているのが Narrative CV である。これまでの研究者の研究履歴を見れば、研究に関する貢献、また、定量的な研究成果も把握できる。

DORAは21,000人以上の個人と3,000を超える機関が署名をしている。現在、2人のメンバーと2人のインターンにより運営している。

最後に、英国で進めている取組 REF2028（今年、初期決定事項を発表）を紹介する。REF2028では、評価の重点を、個人の業績から、より健全な研究環境への貢献へと変更しようとしている。研究環境をどのように測定するかについては、これから協議される。

③ 「研究評価改革における国際動向」サイエンス ヨーロッパ ボレル-ダミアン事務総長（CoARA 運営委員会メンバー）

CoARAとして、特に4つの重要なコミットメントがある。

- ・ 研究の必要性や特性に応じて、研究への貢献やキャリアに多様性があることを認識する
- ・ 研究評価はピアレビューを中心とした定性的評価に基づき、定量的指標の責任ある利用によりサポートされる
- ・ 研究評価において、ジャーナルや出版物に基づく評価基準（JIF や h-index）の不適切な使用を放棄する
- ・ 研究評価における研究機関ランキングの利用を避ける



基調講演を行うサイエンスヨーロッパ
ボレル-ダミアン事務総長

DORA と CoARA については、相互に相乗効果が期待できる。欧州においてはオープンアクセスに向けた動きが広がっている。欧州の加盟国が CoARA の研究評価改革をサポートしているので、今後更に前進していこう。また、CoARA は欧州域内に留まるつもりはなく、更に努力し世界の多くの組織が参加することを奨励していきたい。

（４）パネルディスカッション

① 参加者

(i) ファシリテータ

- ・ 政策研究大学院大学 林教授

(ii) パネリスト

- ・ DORA カリー運営委員長
- ・ サイエンスヨーロッパ ボレル-ダミアン事務総長（CoARA 運営委員会メンバー）
- ・ カナダ自然科学・工学会議 モリス研究評価ディレクター
- ・ 東北大学 佐藤副学長
- ・ 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）金子理事

② ディスカッション概要

ディスカッションに先立ち、スーザン・モリス氏から DORA 原則を反映したカナダ自然科学・工学会議のアプローチ、佐藤氏から東北大学での研究者情報の取りまとめデータベース（レイク）の取り組み、金子理事より JST における評価の概要について紹介があった。

続いて、ファシリテータである林教授より、議論の論点として「定性的な評価が重要なことは全員同意するところであるが、具体的にはどういった手法で評価することが可能か（大学における研究者の業績評価では、若手研究者の評価や多数の研究者を個々の専門性に応じてどのように評

価しているのか)、各国はDORAやCoARAをどう受け止めて何を行っているのか」が提示され、ディスカッションが行われた。

- 評価の負担を減らすために、AIを活用するという手もある。(モリス研究評価ディレクター)
- AIの活用の可能性は否定しないが慎重さが求められる。研究評価は個々の業績だけではなく、グローバルな持続可能性に係わってくる問題。科学は個人の競争ではなく、我々が一致協力して進めていくことが重要である。研究評価に対しては、加盟国間の競争になってはならない。評価は研究環境を改善していくものでなければならない。REF2028では、その点に重心を置くよう検討を進めている。(カーリー運営委員長)
- 評価システムをより定性的にしていくには、Narrative CVの使用が一層採用されていくことは想像に難くない。一方、Narrative CVは、ストーリーや物語を作り上げるものではない。学術的な厳密さの要素を含める必要がある。また、過去の実績とビジョンのバランスを取ることがより重要。(ボレル-ダミアン事務総長)
- 評価疲れの問題への対応が必要。機関によって評価項目がばらばらという現実があり、研究者はそれに合わせてデータを準備しないといけないので、疲弊している。その疲弊を少しでも軽減できるようにデータレイク立ち上げた。(佐藤副学長)
- 評価の負担と疲れは重要な対処すべき問題である。多くの大学や助成機関において使用するNarrative CVのフォーマットの共通項が高いということが重要。Narrative CVでは共通化出来るところは共通化していくことが大事である。(カーリー運営委員長)
- 公募における申請書の評価では、提案に対する実行力があるのかをみるのが難しい。実行力の評価にあたり論文実績などを活用していた。EUのグラントでは、プロポーザルに関して、10個の業績をあげることになっているが、JSTでもこの仕組みを取り入れようか現在検討している。



カナダ自然科学・工学会議における研究評価を紹介するモリス研究評価ディレクター



カナダ自然科学・工学会議 モリス研究評価ディレクター (左) とサイエンスヨーロッパ ボレル-ダミアン事務総長 (右)



討論を行う東北大学 佐藤副学長

10 個の業績については、その業績が科学的に優れているものと認められなければ意味がない。厳格性が必要である。（金子理事）

- ・ 評価改革には「期待」がある。究極的な目標はなるべく申請者の負担を最低限にすること。そのためには各機関の「期待」の明確な定義が重要。バイアスがなるべく低いシステムの構築が必要。（カー運営委員長）
- ・ 評価改革について、サイエンスヨーロッパでは FA、行政機関、研究機関、アカデミアを束ねたような共通認識を作っていくプラットフォームが既に存在する。一方、日本では、学会から提言が出されているものの、行政機関や FA で話をするプラットフォームが存在しない。ボトムアップ的にアカデミアと FA、あるいは行政機関が共通認識を持つことを進めていく機運がもう少し高まれば良い。（金子理事）



パネルディスカッションの様子

(5) 閉会挨拶 国立研究開発法人科学技術振興機構 金子理事

本日多くの方に出席いただいたことを感謝申し上げます。また講演者・パネリストの皆様、ファシリテータを務めていただいた林教授にお礼申し上げます。本日の議論でもあったとおり、研究開発や研究者を一律の定量指標で評価することは、多様な価値を持つ研究開発の推進に寄与しないという認識を共有できたと思う。



閉会挨拶をする JST 金子理事

7. 本件についての問い合わせ先

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）戦略研究推進部 研究評価グループ

以上